

説 教 『狭き門』山本 護牧師
聖 書 エレミヤ書 29：12～14／マタイ福音書 7：13～14

「狭き門より入れ、滅びにいたる門は大きく、その路は廣く、之より入る者おほし(文語訳マタイ 7:13)」。昔、A.ジイドの「狭き門」は思春期の必読書だった。入学試験が厳しい学校は「狭き門」と称する。このように「狭き門」は知られているが、出典元である福音書の意味はきちんと伝えられていない。

イエスは続けて語った。「しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない(7:14)」。神の御許に迎えられる者は「狭き門」、ほんの僅かなのだろうか。だがイエスは少し後でこう語っている。「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い(11:30)」。だとすれば「広き門」になる。いったい、僅かな者だけが救われるのか、それとも誰もが救われるのか。

小学五年の頃、友達 4～5 人でのサイクリング、数時間をかけて奥多摩の大岳鍾乳洞まで行った。まことに侘しい名所で、門番の怪しい婆さんから蝋燭を 20 円で買い入洞した。高ぶる冒険心で威勢のよかった少年たちだが、横臥姿勢で一人ずつ狭隘な鍾乳孔を通り抜ける時には重く沈黙した。私にとって狭き門のイメージは鍾乳孔。あの時の感覚から「洗礼＝新しい誕生」が連想される。聖書の分析などすっ飛ばすなら、直感的に、狭き門とは洗礼をも指し示しているのではないか、と思う。

体験こそ深山の鍾乳洞だったが、実際「門」がどこにあるかと想像すれば市街地だろう。まず目につくのは広き門。その扉は開け放たれ、にぎやかな物売りの声、誰もが楽しそうに、おしゃべりしながら往来している。しかしうっすらと感ずる。どことなく虚無が漂ってはいまいか。陽気にふるまっても、自分自身と誠実に向かい合っておらず、能力、地位、属性、そんなものを他者と比較しながら牽制し合っている。「滅びに通じる門は広い(7:13)」。にぎやかで、明るい、広い門である。

「狭い門から入りなさい(7:13)」とイエスに命じられ、狭き門をなんとか見つける。ところが扉は閉まっており、周囲には誰もいない。「門をたたきなさい、そうすれば開かれる(7:7)」。思ったよりも狭い門だが、叩き、開けてもらい、荷をおろし、一人かろうじて狭き門を「くぐる」。これが信仰の道なのか。誘い合って通る門ではない。「だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる(7:8)」。「だれでも」だ。だが一人ずつ、だ。沈黙し、小さく身をかがめてくぐる。あの鍾乳孔のように。己を見つめ、神と向かい合う。神の前で、己と向かい合う。狭き門は祈りでもあろう。

イエスに限らず預言者も、神の言葉をこう告げている。「わたしを尋ね求めるならば見だし、心を尽くしてわたしを求めらば、わたしに出会うであろう(エレヤ 29:13)」。狭き門を叩き、頭を垂れて身を低くし、門をくぐり、私たちは神の御前に立つ。手土産も、手柄もなく、私そのものとして立つ。

「そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く(29:12)」。 「あなたたち」と複数なのは、教会が「一人ずつ」の集まりだから。狭き門をくぐった「一人」は集団に呑みこまれることはない。広き世の門でも、超俗が混じり合う聖所でも平気で往来できる。同調圧力、甘言、脅しも、平気で受け止められる。狭き門を通して御前に立つ者は、何も持っていないゆえに。



《おまけのひとこと》

狭き門 どれほどの狭さか 裏木戸を抜ける時には頭を垂れ 茶室の躡り口なら硬い体にやや辛い狭さに比例した恵みではない 広き門は開け放たれている 閉じられて日々叩きうる狭き門がよい